

文化財 やまと

大和村文化財保護協会発行



七鈴五獣鏡

昨年七月、篠脇城下の東氏居館跡の発掘が始められ、一〇月末までに八〇〇平方メートル(約八畝)の調査を終った。まだ全体計画の1/4にも達しない面積であるけれども、出土した遺物はすでに一万点を超え、特に地表から約一・メートルの深さの所に庭園の一部と見られる池や中の島などの遺構が現われてきたのは驚かさされた。また遺物の中には、当時上流社会でしか使われなかった天目茶わんや、日本ではまだ作られなかった、中国製青磁器の破片などもいくつか混っていて、城主の文化生活が戦国の武将には珍しく高度なものであったことを感じさせた。

ただ残念なのは、それら貴重な出土品が、満足に原形を保っているものは皆無に近く、ほとんど全部が細かい破片の哀れな姿で現われてくることである。これは多くの埋蔵文化財に免れがたい宿命とも考えられるが、もし戦争に会わなかったら、これほどではなかったらうと思われる。

この篠脇城は前後二回敵襲を受けている。そのため東氏が長年

破壊と創造

会長 野田直治

わたって築いた篠脇文化が相当の打撃を受けたであろうとは、これまで推測されていたことであるが、今回の調査によってそれが実証されただけでなく、想像以上にひどく、ほとんど壊滅的な損害を受けたことが、ほほ明らかになつたようである。もつともこれは現時点でいえることであつて、確実なことは今後の発掘に待つほかない。

私は、こうした発掘現場を見ながら、ゆくりなくも俳人芭蕉が奥州平泉(岩手県)を訪ねた時の情景を思つてみた。それは

夏草やつわものどもが夢の跡
という有名な俳句についてである。「つわものども」はだれを指すか諸説があるが、やはり直接的には高館(たかだて)で最後を遂げた源義経とその部下たちを指すものと見るべきであろう。

芭蕉が門人曾良(そら)をつれて平泉を訪ねたのは、元禄二年(一六八九)五月のことで、義経が敗死した年から数えてちょうど五〇〇年目であつた。五〇〇年前の平泉は奥州藤原氏が三代にわたつて栄華を極めた所であるが、芭蕉のころはすべて荒廃し、ただ金色堂だけが昔の面影を留めていた。

しかし芭蕉が最初に訪ねたのは金色堂ではなく、義経主従のたてこもつたという高館(たかだて、一名衣川の館)の跡であつた。

高館から見下ろすと、藤原氏三代の居館であつた平泉館(ひらいずみのやかた)の跡は、今は田んぼだつた。「奥の細道」に「秀衡が跡は田野になりて金鶏山のみ形を残す」と記されているが、その「秀衡(ひでのちの栄華は秀衡のころ頂点に達したといわれ、朝廷もその実力を認めて、彼を鎮守府將軍とした。白鳥町石徹白の観音堂に安置されている金銅の虚空蔵菩薩(国の重文)は彼の寄進といわれている。それほど彼の名は諸国にひびいていたのである。その秀衡が失意の義経をかかまつて鎌倉幕府の圧力に對抗したので、彼の在世中はさす

がの頼朝も奥州には手を出さなかつた。

義経が衣川館(高館)の一戦に敗れ、波乱の生涯を閉じたのは、秀衡の死後一年余り後のことであつた。芭蕉は若くして散つた悲運の武将に限りない同情を寄せ、「さても義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の草むらとなる」(奥の細道)と記し、また平泉の荒廃を悲しんで、「国破れて山河あり」という中国の古詩を思い起こして、涙を流しながら、上記「夏草や」の名句をよんだのである。

戦争は、文化と文化財の破壊者である。戦争によって藤原氏三代の文化財は破壊された。それは永遠にとり戻すことができない。そこに人々は限りない愛惜の情を感じる。

しかしながら、平泉の文化と文化財は破壊で終わったのではなかつた。それは五〇〇年後の天才詩人芭蕉によって、新たな生命を吹きこまれ、「奥の細道」に見るようになつて、美しい文章と俳句になつて、みにごとく創造されたのである。それは永遠に亡びることのない精神文化の創造であつた。

薬師信仰と

大和村の薬師堂

畑中浄園



の内石薬師堂と
河辺薬師堂

から平安時代にかけて仏教が全国に広がったが、それは深遠な教理の理解や修道ではなく、庶民の生活を脅かす病気を治療する仏としての薬師信仰がいち早く受け入れられていったことは当然である。

薬師如来は、薬師琉璃光如来といて、東方淨琉璃世界の仏である。その仏像はチベット・蒙古・敦煌の千仏洞・中国竜門の石窟寺・朝鮮など広く大陸に残存している。日本の仏教も薬師信仰からはじまったといわれており、法隆寺講堂に安置された薬師如来像は、用明天皇の病氣平癒を祈願して造られた日本最初の仏像であった。また日本書紀にも朱鳥元年（六八六）天武天皇の病氣平癒を祈願して川原寺において薬師経が誦誦されたといっている。医療の幼稚であった当時においては、医王薬師・大医王仏ともいわれた薬師如来に天皇や貴族達が病根を除くための祈願を盛んに行っている。奈良

から平安時代にかけて仏教が全国に広がったが、それは深遠な教理の理解や修道ではなく、庶民の生活を脅かす病気を治療する仏としての薬師信仰がいち早く受け入れられていったことは当然である。

上にも影響をおよぼすにつれて、郡上では阿弥陀の信仰がこれにとつてかわるようになった。しかしそれでもなお、薬師への信仰が全くすたれたというわけではなく、民間信仰として根強く残っていたと思われる。安永二年（一七七三）の「郡上領留記」（白鳥町史料編）によつて、郡上領一二一カ村の中から民間信仰の祠堂を拾うと

この薬師堂三〇のうち、大和村にぞくするものを前記の「留記」によつてあげると、（カッコ内は筆者の注記）

上にも影響をおよぼすにつれて、郡上では阿弥陀の信仰がこれにとつてかわるようになった。しかしそれでもなお、薬師への信仰が全くすたれたというわけではなく、民間信仰として根強く残っていたと思われる。安永二年（一七七三）の「郡上領留記」（白鳥町史料編）によつて、郡上領一二一カ村の中から民間信仰の祠堂を拾うと

徳永村 薬師堂四尺に五尺五寸
板葺（明治初年より多賀神社となる）
落部村 薬師堂五尺四面 堂守
喜左衛門
名血部村 氏神社塔三神一間に
四尺板葺（三神は白山・泉・多賀）
東俣村 薬師堂三尺四面 祈宜
四郎左衛門
牧村 薬師堂一尺五寸回り（現在未確認）
西俣村 薬師堂四尺四面板葺
村普請 祈宜弥一兵衛（現当主は榊田吉計氏）
母袋村 薬師堂三尺四面
小間見村 薬師堂三間二間
大間見村 薬師堂三尺四方 薬師堂三尺四方（この二堂のうち一室は口大間見にあり、明治初年に多賀神社となった。他の一堂は不明）
とある。この合計一一の祠堂の数に当時の郡上領内三〇堂の三分の一を大和村で占めていることを示している。この記録のほか、下万場に森太郎兵衛の薬師堂（これは万場七軒七社の一つ）名血部公民館前に薬師堂、下栗果に中山薬師がある。この中山薬師堂には寛

この薬師堂三〇のうち、大和村にぞくするものを前記の「留記」によつてあげると、（カッコ内は筆者の注記）

この薬師堂三〇のうち、大和村にぞくするものを前記の「留記」によつてあげると、（カッコ内は筆者の注記）



厚谷薬師堂内の
馬の絵

文四年（一六六四）の棟札があり御物石など古代遺物の石器が多数蔵せられていた。また、現存しな

これらの堂の多くは小祠堂で、人目にもつきにくい所にあり、ただ詳細な調査ができていないが、東俣（古道）の厚谷の薬師堂（堂守清水佐市氏）には文化・天保の年号の入った美しい小絵馬が二枚、金銅製の蚕桑神一体がある。また、河辺薬師の本尊は朱で彩色された素朴な木像で衣紋の流れが美しい。寛政一〇年（一七九八）口神路の森十郎（現当主正直氏）の薬師如来座像がこの河辺薬師堂に納められたことがあると「中興留」（森正直氏蔵）に見えてくる。なお、この堂内にはタテ一六センチ、台座の径八センチの石像が合祀されている（写真右下の小像）きわめて素朴な像で、二重の

これらの堂の多くは小祠堂で、人目にもつきにくい所にあり、ただ詳細な調査ができていないが、東俣（古道）の厚谷の薬師堂（堂守清水佐市氏）には文化・天保の年号の入った美しい小絵馬が二枚、金銅製の蚕桑神一体がある。また、河辺薬師の本尊は朱で彩色された素朴な木像で衣紋の流れが美しい。寛政一〇年（一七九八）口神路の森十郎（現当主正直氏）の薬師如来座像がこの河辺薬師堂に納められたことがあると「中興留」（森正直氏蔵）に見えてくる。なお、この堂内にはタテ一六センチ、台座の径八センチの石像が合祀されている（写真右下の小像）きわめて素朴な像で、二重の

須弥座の上に半身が立体彫りになっている珍しい石像で、江戸時代にはこうした小石像が民間の小祠堂にまつられ信仰の対象になったようである。以上これら薬師堂の

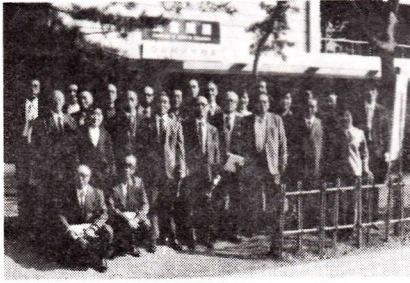
多くは、その創立年代が不明である。ただ徳永薬師は明応三年（一四九四）の創建といひ（町村略志）、河辺薬師は嘉吉元年（一四四一）といひ（伝えがあるが記録は残っていない。江戸時代、農民支配の基本法典である「五人組帳」に、新しく寺社を建立することや、ほこら念仏・題目の石塔・供養塚・庚申塚・地藏堂の類など新規に建立することが堅く禁止されているから、大和村に現存する薬師堂も、その多くは江戸時代以前から存在していたものと一応は考えられる。いづれにしても、日本仏教史の流れの中で、古代・中世に根をはった薬師信仰が、大和村においてもその影響が色濃く残っているものと考えられ、当地の古代・中世の精神文化の高さをもの語っているといつても過言ではないようである。各の薬師堂については、今後の調査にまたねばならないので、各位のご教示をお願いする次第である。

正倉院展を見学して

河合芳江

在であると言われていました。毎年正倉院展を見学して、今も私の心に残っている宝物を二、三列挙してみたいと思います。如意については……

正倉というのは昔の官倉のこと。奈良・平安の時代には中央の大蔵省をはじめ地方の役所に至るまで、これが設けられていたそうです。そして大きな寺はこれを持っていて宝物類を納めていたのですが、現在ではそのことごとくが滅んでしまい、最後にこの宝庫一棟だけが残り、千二百余年前の数々の貴重な宝物を現代に伝えてきた天平の宝庫となり、八世紀のアジア中近東の文化を伝える重要な存



正倉院にて

如意というのは僧侶が孫の手のように背を意の如く掻く実用的な用具でしたが、仏教の形式化にもない実用を離れて威儀をととのえる儀式的なものになり、次第に装飾化されてきたものだそうです。黄金珠玉荘犀角如意は以前に台湾へ旅行し故宮博物館で見学した数

多くの如意とは趣が異なり、非常に女性的でこまやかで優雅な感じを受けました。この如意には撥鏤・嵌玉・木画・彫刻等さまざまな技法が取り入れられ、それらを巧みに組み合わせると一つの作品を完成させています。又ジャンボ型如意としては斑犀の如意があり犀角はインドからもたらされたと言われ、これを持った僧侶は定めし威風堂々としてその豪華さを誇ったかも知れません。前者に比して男性的な感じを受けました。

鳥毛屏風について……この屏風は江戸時代から鴨毛屏風の名で知られています。近年貼布の鳥毛を調査したところ日本産

雑や山鳥の毛を使っていることがわかった由。これと同じように鳥毛を使った樹下美人図（鳥毛立女屏風とも言われています。）の屏風も同じ日本産の鳥毛を使用していると言われていました。面白いのは当時のファッションをあらわしている代表美人に最高の衣装を着せたのかも知れません。今で言えばミンクのコートをミニユニバーズの代表に着せたようなもので、女性の流行は古今東西を通じていつの世代にも通ずるものがあるように大変面白いと思えました。

鳥獣花背方鏡は海獣葡萄鏡とも言われています。この鏡は鏡上りが非常によく保存状態も良好で白銀色に輝き伝世品としては最上のものであり、名工の技術と優秀さを見ることが出来ます。これは唐より船で運ばれたものらしく奈良朝時代には特に鏡の製造が盛んであったようです。平螺細背八角鏡は九面あるそうです。花卉や葉心を朱や金泥で彩色してその上に琥珀をはめこんで透視の効果をねらっている点など心にくい程のすばらしさであります。又色のコントラストのすばらしさは盛唐時代に

ふさわしい豊かな色彩美にあふれています。私は二度三度大勢の人々の頭をかきわけて後戻りしながら小さな目を皿のように丸くしてこの鏡類を心の奥に焼きつけるように眺めてきました。

「天平の鏡に魅入り思い草」
赤地鸞鷲唐草文錦について……これは聖武天皇御一周忌齋会に斎場であった東大寺に飾られたものだそうです。これを復原してみますと蓮華上に花を啗くわえて相対する鸞鷲を中心に蓮唐草の円輪で囲んだ注文と同じように蓮唐草の菱形副文がぐの目に割りつけてあったそうです。この唐花文も当時の流行だったと言えましょう。昔から仲のよい夫婦のことを鸞鷲のようだとか鸞鷲の契りとか言われてきました。聖武天皇しきあとの光明皇后の悲しみがこの文様一つを見ても偲おもはれてきます。

正倉院の宝物は、天平文化の遺産であるばかりでなく、古代オリエント文化がシルクロードを経て唐文化と融合し、更に我が国において花開いた世界的な貴重な文化財であります。私達はこの尊い文化遺産を大切に後世に伝えて行きたいものです。

◀ 随想 ▶
明建神社の
桜並木ほか

田中 裕



明建神社の桜並木

大和村広報百十六号で桜の花が日本人の共感をよぶものとして、常緑・宗祇の連歌をはじめとしていくつかの歌や句を紹介したが、もっと古くから日本人の心の中には桜に対する愛着があったようである。

尤恭天皇の恋人であった衣通姫を、桜の美しさにたとえて、「花ぐはし桜の愛で同愛では早くは愛でず我が愛づる子ら」という歌を贈られている。

万葉集には、桜をよんだ歌が四

十一首あるが、
「春日なる三笠の山に月いでぬかも」
佐紀山に咲ける桜の花の見ゆべとか、
「青丹よし奈良の都は咲く花のにおうが如く今盛りなり」などは有名である。

尚、紫宸殿の左近の桜もかつては梅であったが、仁明天皇の頃に桜にかえられたという。

平安時代になると、
「見わたせば 柳桜をこきまぜて 都ぞ春のにしきなりける」
素性法師
「世の中にたえて桜のなかりせば」
春の心はのどけからまし」

在原業平

更に下つて平忠度の「ささ波や志賀の都は荒れにしを」

昔ながらの山桜かな」などはよく知られている。

江戸時代にな

るともう桜は庶民の花となり、「花の雲 鐘は上野か浅草か」芭蕉
「井の端の桜あぶなし酒の酔」千代女
「天からでも降つたような桜哉」一茶

というように身近なものになってきた。

いわゆる桜の名所といわれているところ、たとえば吉野山とか、岐阜県では揖斐郡の霞間が谷の桜はヤマザクラである。

日本で一番古いといわれる山梨県の神代桜や根尾の淡墨桜はエドヒガンである。これも、もとは山に自然にはえていたものである。

ヤマザクラやヒガンザクラは、ソメイヨシノのようなはなやかさはないが、日本人の心にあつた渋さというものがある。そして丈夫であり寿命も長い。明建の桜も補植する場合、ヤマザクラかヒガンザクラにしてほしいものである。

明建の桜は年々勢がなくなつて行くようである。一昨年、県文化財審議委員の堀先生についてまわつた時も、明建の桜の幹についている苔（正確には地衣類）やノキシノブなどを気にして居られた。

幸い道路はつけかえられるのとこ

とで、排気ガスや車の重圧によつていためられるという心配はなくなるが、何とかこの幹についているものをとつてやりたいものである。

古道の細川さんの家の前に、大きなヒイラギがある。ヒイラギはモクセイ科の常緑樹で、関東以西の山地に自生している。この木の葉の縁には、一〜二個のするどいとげ状の鋸歯がある。そのため古くは、悪魔除けとして節分の日にイワシの頭をそえて門口にさしておいたというが、今はその風習もすたれてしまった。このヒイラギは老木になるととげがなくなる。大体、七、八十年たゝないとげのない葉にならないという。樹令五百年といわれている細川さんの家のヒイラギにもとげがない。

同じモクセイ科の仲間、中国から渡来したキンモクセイ、ギンモクセイがあつて、秋に強く甘いかおりを放つ。これらは雌雄異株で、面白いことに、キンモクセイもギンモクセイも日本には雌株はない。

※

大和村は北と南、日本海と太平洋の接点にあり、植物分布から見るとそれぞれの型の植物がかなり見られる。現在指定されているものはほとんど神社、寺院にあるものだが、それ以外にも保護したいものがいくつかある。

一度絶滅してしまつと、二度と



村井正蔵

無碍光の眞の道を説き給ふ仏の瞳永遠に変わらじ

興亡は世の常なりし碑の前にひとり佇しすすきゆれつつ

有代喜平

遠祖の遺して呉れし文化財護りて後の人につたへむ
日でり続き関伽の水さへ絶えし里娘の願ひに湧きて尽きさり
滾滾とわき出る清水尽くるなくみ仏の関伽もゆたかとなりぬ

牧むらの道

土松新逸



大門見妙望むからわきのし

町期)の発音とのことであるからこの道標は相当に古いということがわかるわけである。この道標と並んで「南無地藏大菩薩右はくろくす道左は白くす道」と彫った道標があり、天保九戊年九月日建立と彫ってある。これは、縦一〇四cm、横五〇cmの自然石で前記のものより大きくて人目につき易い。この道標建立について、ときの藩庁へ願ひ出た文書の案文と思われるものが、落部大坪武雄家にある。これによると「徳永の四ツ辻で道をとりに違えて難儀をするものが多いのでへ右久留須妙見参詣道、左飛驒白山越前穴馬道」とし、これに地藏尊像を彫りつけて建立したい」とあり、当時この辺りの道が迷いやすいようなところだったことが想像できる。みよう「古老に聞けばこの四ツ辻から牧へ入る道は相当の坂道であったとのことである。この近所ではこの道標を「辻の地藏様」といって花を供えたりして大切に取り扱い、毎年八月一日にはこの前で盆踊りを催していた。近年は車の通行量が増えたので、ここで踊るのをやめて、役場前広場で踊るようになった。この辻から東方へ四畑余で代(室棚井へ達し、棚井から右へ折れて

五畑余で明方村寒水へ、左へ進んで四畑ほどで母袋へ達する。この棚井までの間が牧区内であって、今はあまり曲り道はなくなったが昭和時代になって道路の改修が行われる前には随分曲り道が多かった。先ず、近次地内の旧道は、金子研二家の下から清水定家の下へ大きく曲って水神社(うすいぶんの宮)の下へ出たのであった。この道は清水回りともいった。清水定家の下に源兵衛清水といつてもきれいな清水があるが、以前は道行く人はこの清水で渴をいやしたのであった。この辺りで以前牧区元兼の河合時夫氏が石剣片を拾われたことがある。この清水から五〇mほど東に御手洗清水というのがあり、遠藤常友が妙見社へ奉納した絵馬の馬が夜ぬけ出てこの清水へ水を飲みに来たという伝説がある。水際の石に馬の蹄形に似たくぼみがみられたが、先年の浮場整備の際にこの清水は土に埋って、今はその所在がわからなくなった。

木蛇寺地内では、加藤謙二家の下へ大きく回り込んでいた。ここでは、往時は水神社の下から遠藤一家・日置一朗家の下へ大きく回り込んでいたようである。この辺りには木蛇寺跡があり、慈永大姉の墓(村指定史跡)があり、また東氏代々の碑が建っている。この東氏代々の碑は、明治三六年に建立されたもので、慈永大姉の墓の両側に自然石で東氏代々の法号が彫つてある。この道と栗泉川との間の田の中に、天文九年朝倉軍来攻のときの死者を埋めたといふ千人塚が三基ある。

この道から栗泉川を隔てて向う側、元兼からて島を通つて、つり橋を渡つて小牧田へ出る。この道の入口、元兼の東北山麓には東林寺跡がある。この東林寺跡から宝曆九年(一七五九)に懸仏六体と和鏡二面が出土している。(いずれも大和村重要文化財)

妙見は、今回の浮場整備事業に併せて泉道も付け替えられることとなり、明建神社の横大門(桜並木)をさけて、栗泉川沿いに新設されることは、文化財(天然記念物)保存のためにも大変ありがたいことである。この道の辺りには木戸口清水(村指定史跡)、明建神社の社叢(県指定天然記念物)、篠脇城跡(県指定史跡)などがあり、現在発掘調査中の東氏居館跡もある。また、尊星王院跡・勸業寺跡なども伝えられており、尊星王院跡からは四耳壺が、勸業寺跡からは古瀬戸灰釉瓶子(共に村指定重要文化財)が出土している。

妙見から山田への道に三日坂がある。朝倉軍が篠脇山で破れ、敗走のとき屍を三日間通れなかつたといふ伝説の坂であり、改修される前は石仏谷へ曲り込んでおり、坂も急で危ない道であった。この曲り込んだ道傍に石が三個並べて立ててあり、狐が娘に化けて出るといふうて気味の悪い所だつた。この道の向い側は田畑で、今回浮場整備事業に併せて行われる泉道付け替え工事で、泉道がこの田畑を通るようになることである。

山田も、遠藤甲子男家の下から松森見善家の下へ曲り込み、日置吾朗家の下へ出て、また松森見成家の下から松森喜勇光家の下へ曲り込み、さらにまた斎藤敷家の下から山の下へ曲り込むなど、曲りくねつた道であった。

中世以後、特に歴史の多い牧むらのこの道も近年すっかり変つた。妙見大門の両端に七〇〇年間立ちつくしている老杉は、この移り変りを何と見つけているだろうか。

一乗谷朝倉氏館跡
見学記
平泉寺町白山神社

有代 信吾

りしたことで
あろう。また
錫杖の音が森
閑とした樹間
に消えていつ
たことであら
う。バスを降りて少し登ると「名
勝旧玄成院庭園」と刻まれた石碑
がある。この古いくぐり戸を入
ると白山神社社務所である。羽織
袴の平泉澄先生があたたかく迎
えて下さる。苔の色あざやかな庭
園をていねいに説明して見せて下
さる。また社務所で豊太閤の筆跡
など宝物を参観し、本殿に参拝し
て、厚く礼を述べてバスに乗る。
途中レストランで昼食、木の香も
新しい部屋で、会員の方からいた
だいた酒もあって賑やかにいたゞ
く。それから美山町を経て一乗谷
に向かう。

整然と大きな礎石が並んで雨に打
たれていた。上の段に上ると南陽
寺跡、將軍足利義昭を迎えて観桜
の宴を催した所とか、今はきれいな
庭園である。四四〇年昔、ここ
からはるばる郡上山田ノ庄まで兵
馬を進めたのかと、しばしたたず
んで一乗谷村を見下ろす。雨のた
め山上の本丸跡を割愛してバスに
もどる。

朝倉城跡探訪外

五月雨の朝倉城跡苔青し

七日祭古式ゆかしや蟬の鳴く

七日祭御神酒いただき百日紅

有代 信子

累代の紅葉領家の墓に散る

しぐれきてミイラの寺の夕灯り

顔なでて風の行方や山芒

朝霧や峠ほつかの休み石

秋祭り鎮守の杜のほりみち

有代 いせ

館跡宴のあとに花散りて

芽柳や青磁のかけら居館跡

お供へを椿の葉に受け神送り

河合 芳江

散華

おお寺の秋空高く鴟尾放光

大仏の散華はすがし蓮枯れて

一寸髪や逢坂山の小夜時雨

桑田 和子

雑詠

城跡に桑を摘みつつ風をさく

城跡の土たがやして桑植うる

山桜一と枝供華とし東家の碑

境内に東氏しのぶや桜散る

解け初めり五輪の塔を埋めし雪

下広す系乃

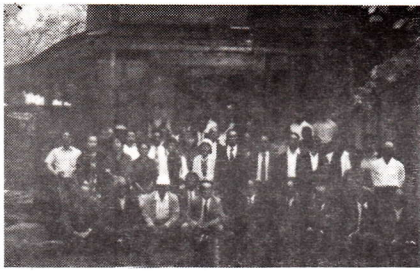
金剛の露一粒や松の葉に

豪雪の里見下ろして帰り杉

川へだて薬師の杜の祭笛

花嫁の寺より出でて実南天

安政のお地藏峠に春の風



白山神社にて

一乗谷は戦国の武將朝倉氏が五
代一〇二年間の居城の跡。ここに着いた時、雨が降り出した。昔から北陸に行く時は弁当を忘れても傘を忘れるなどいわれているのを思い出して持って来たのが幸いであつた。傘を持たない人は五〇〇円で笠を買って、見字に出かける。きれいに整備された居館跡には、

バスの中からふり返ってみると一乗谷は薄い霧にかすんで静もっていた。

會員名簿

(順序不同)

〔氏名〕	〔役名〕	〔電話番号〕
山下 運平	顧問	二四〇六
国枝 貞雄		二二九三
日置 照郎		二〇七二
高橋 義一	常任理事	三七九二
高橋 明	理事	二四八八
加藤 文蔵		二八〇二
田中 裕		二二〇〇
池田 憲三		二二八二
畑中 定夫		二一六八
小池 久江	理事	二五七六
青木 卦二		二二九二
畑中 澄子		三五〇七
河合 俊次		二二四六
河合 芳江		二二四六
畑中 清子		三三五五
河合 恒		二三五八
佐藤 光一		三三〇一
加藤 吉男		二〇六四
日置 智夫	五六年度	二七三〇
《大間見》		
野田 直治	会長	二一八五
野田 茂	理事	二二八五
青木 新三		二四三六
村井 正蔵	監事	二二三三
日置 繁		二二五四
大野 隆成		二二三〇
大野 紀子		二二三〇
清水 作衛		三〇八六
小野江 選量		二七二六
山下 直美		三九三八
小池八重子		二三〇九
藤沢五三郎		三一六
日置 幸雄		二七七〇
池田 栄		三〇九〇
小野木弘美		二七四七
小野江 勉		二七二五
日置智恵子		三〇五二
松井 直	理事	四〇八五
松井 隆		三五〇三
坪井 真澄		三九九〇
坪井 庄市		三五〇四
古田 忠		四〇九〇
井口 一男		四〇二〇
佐藤 秀夫		四〇〇一
《小間見》		
平沢 勤		三九三七
島崎 英二		三〇三七
田代 俊雄	理事	三九六五
《万場》		
畑中 浄園	副会長	二四四一
畑中 真澄		二四四一
石神 堯生		二四一三
井俣 初枝		二七五八
箕 明代		二五三二
稲葉 春吉		二五〇三
墨岩きくゑ		二四六〇
桑田 和子		二四一九
井上 昌保		二五二一
桑田 渥美		二四四六
《徳永》		
木島 観一	理事	二〇二三
木島 洋女		二五九一
土松 新逸	常任理事 計	二七三一
木島 泉	理事	二〇二三
鷺見 鈴子		二〇〇五
田中まさを		二〇六七
鷺見 おと		二二八九
直井すゝ江		三五九二
矢野原幸子		二〇七七
鷺見 ゆき		二二八九
畑中 文枝		二三八二
大場 賢一		二五七七
遠藤 賢逸	五六年度	二二二一
《河辺》		
田中喜一郎	理事	三四一〇
清水美佐子		二〇二一
清水 貞子	理事	二〇五二
横枕千代子		二三八九
尾藤 元子		二一四七
清水 幸江		二〇一九
前田 孝		二二〇一
岩谷ますの		三三六七
田口 政雄		三一七四
《神路》		
森 忠敬	理事	二〇八三
森 捨吉		二三四八
和田 月男		三四六三
森 桂		二四八九
山田 真人		二二一四
《牧》		
栗飯原常城	理事	二三六二
土松 康二		二七二九
滝日 貞一		二六六二
滝日 準一		二七〇五
加藤 一男	理事	二八七〇
日置 一朗		三六七四
遠藤 周一		二八九〇
松森 益吉		三九二三
田口 勇治		三九五〇
日置 元衛		三四一七
清水 定		二七一〇
粥川 溜		三三八七
《栗巢》		
島崎 増造	監事	二二三六
増田 洋子		四〇四一
武田 信康		二二八四
中山周左衛門	理事	二七二八
鷺見 豊夫		二七八八
《古道》		
松井 弘雄	理事	二七九五
細川 優		二八六一
《名血部》		
尾藤 由		三四三〇
有代 喜平		二二〇一
有代 信吾	理事 書記	三七九一
有代 いせ		三七九一
森下 正則		三四一三
下広 茂一		三八九五
下広すゑの		三七九〇
永谷 広		三七六七
佐尾 かと		三四二二
《野口》		
森藤 幸	副会長	二七〇六
大坪 武夫		二〇九一
《洞口》		
此島 広	顧問	二四八〇
須甲 甚一		二六六一
《落部》		
若山 清		二八一七
《場皿》		
直井 篤美		二六二二
《福田》		
堀 貞男		二二三二
山田 長次	理事	三六四八
山田 昌枝		三六四八
森 数雄		二五五四
山田 良		二七九一
山田 良一		三七二八
松井 京一		三五八二

昭和五五年度 事業報告

四月一日

○役員会

於村民センター 一、二名出席
昭和五四年度事業報告案および
収支決算案について

昭和五五年度事業計画案および
収支予算案について

昭和五五年度総会開催について
当日特に山下村長来席あり、東
氏居館跡発掘調査について会員
の特別の協力を願いたい、史料
館の建設については五五年度中
に写真真を作りたいたと、また村
政一般について説明あり、すべ
てに協力を願いたいと挨拶があ
った。

四月一九日

○総会 於村民センター

県本部より石川副会長出席
村長代理岩谷助役

会員五〇名出席

昭和五四年度事業報告および収
支決算承認、昭和五五年度事業
計画および収支予算承認

文化財収蔵庫建設促進要望につ
いて決議

八ミリ映画「明建神社の七日祭
り」を上映

○記念講演「やきものとお国から」

講師 陶芸家 加藤賢司先生
岐大講師 加藤賢司先生

四月一九日

○会報「文化財やまと」第四号を
三月三十一日付発行、本日会員に
配付する。

五月二五日

○現地研修

一 乗谷朝倉館跡見学および平泉
寺町白山神社参拝

参加者

高橋明、田中裕、小池久江、河
合俊次、河合芳江、佐藤光一、
野田直治、野田茂、青木新三、
村井正蔵、日置繁、大野隆成、
小野江選量、山下直美、小池八
重子、坪井庄市、松井直、坪井
政夫、井口一男、佐藤秀夫、畑
中浄園、畑中眞澄、井俣初江、
黒岩さくゑ、桑田渥美、木島観
一、土松新逸、木島泉、鷺見鈴
子、島崎英二、田代俊雄、尾藤
元子、清水幸枝、清水のりこ、
岩谷ますの、田口政雄、加藤一
男、滝日準一、日置貞一、尾藤
由、有代喜平、有代信吾、有代
いせ、佐尾かと、森藤幸、須甲

七月二八日

○役員会

於村民センター 一、二名出席
文化財現地見学について

一、明建神社七日祭
二、東大寺展、熱田神宮宝物展
会費増額及び予算更正について
会費は本年度は増額せず、本会
へは一人当一〇〇〇円を納入する
ことを決議する。

八月七日

○現地研修

明建神社七日祭りを見学参拝

参加者 十数名

八月九日

○臨時現地研修

東大寺展および熱田神宮宝物展
見学

参加者

高橋義一、高橋明、田中裕、小
池久江、野田直治、村井正蔵、
日置繁、小野江選量、山下直美
小池八重子、坪井庄市、松井直
井口一雄、畑中浄園、木島観一
土松新逸、木島泉、鷺見おと、
清水幸江、清水のりこ、岩谷ま
すの、松井弘雄、有代喜平、有

一月二三日

○役員会

於村民センター 一、一名出席
正倉院展見学について

○役員会終了後東氏居館跡発掘調
査現場を見学す。

一月六日

○現地研修

正倉院展見学

参加者

高橋明、田中裕、畑中康蔵、河
合芳江、河合恒、野田直治、野
田茂、日置繁、小野江選量、山
下直美、藤沢五三郎、松井直、
黒岩さくゑ、土松新逸、木島泉
鷺見おと、直井すゑ江、島崎英
二、清水貞子、有代信吾、森藤
幸、此島広、山田長次

二月二一日

○編集委員会

「文化財やまと」第五号発刊に
かかわる原稿執筆依頼につい
て

三月二五日

○役員会

於村民センター 一〇名出席

昭和五五年度事業報告および収
支決算案について
昭和五六年度事業計画および収
支予算案について
昭和五六年度総会開催および記
念講演会について
役員改選について

次号原稿募集

- 一、文化財見学記 八〇〇字程度
- 二、文化財主材短歌 三〜五首
- 俳句 三〜五首
- 原稿〆切 五六年八月末日
- 発刊予定 〃 九月末日
- 宛先 大和村文化財保護
協会事務所（教育
委員会内）

本年度中に左の会員が逝去
されました。謹んで哀悼申し
上げます。

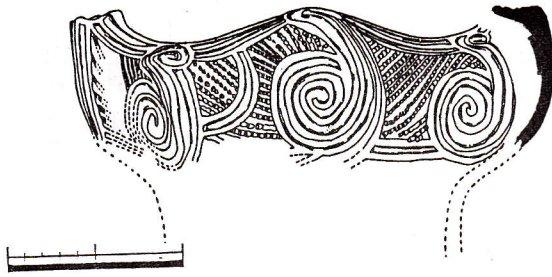
池田 弘氏 五五年七月一五日
日置広雄氏 五六年三月一〇日

新たに指定された
大和村重要文化財

○横通遺跡出土品

A石器類

- スクレーパー 六點
- 石鏃 一五點
- 打製石斧 五點
- 磨製石斧 三點
- 石錘 一點
- 石錐 一點



横通遺跡出土 咲畑系土器

黒よう石片

六點

環状耳飾片(ひすい)

一點

有孔磨製石鏃(弥生期)

一點

くぼみ石(小型)

一點

石皿

一點

石くず類

多数

B石器類

加曽利B式土器片 一〇〇〇点余

C陶器類

須恵器片

五點

平わん(平安期)

一點

白塗系

二〇点

とこなめかめ破片

八點

古瀬戸片

一點

仏花器(鎌倉期)

一點

管理者 大和村教育委員会

○大畑遺跡出土品

A石器類

石皿破片

六點

石棒(大形三點)

四點

たなき石

九點

こすり石

四點

くぼみ石

二點

石錘

七點

石錐

二點

石さじ

三點

皮はぎ

八點

磨製石斧

七點

打製石斧

二二點

石鏃

八〇点

石くず

多数

B石器類縄文中期 一八〇点余

あじろ底

七點

注口土器の注口部

二點

後期すり消し縄文土器片

一點

後期土器口辺部

三點

C陶器類

とこなめかめ破片

六點

山ぢやわん破片

二〇点

管理者 大間見 池田 充彦

○藤代遺跡出土品

A石器類

塊状耳飾破片(滑石製)

二點

石錘

二點

石錐

二點

石鏃

四九點

石さじ

四點

皮はぎ

五點

石斧(磨製定角形)

七點

石棒(田代出土)

一點

石皿破片

一點

石くず

多数

B石器類縄文土器片約二〇〇点

有孔鏃付土器四次穴破片五點外

C陶器類

四耳壺片

二點

こね鉢片

二點

管理者 大間見 藤代 江月

○下栗巣出土石器類

磨製石斧(含破片) 四點



陰地出土釣り手土器

石錘

一點

石刀(破片)

一點

採取者 牧 斎藤 正益

管理者 大和村教育委員会

○古道陰地出土石器土器

A石器類

磨製石斧

六點

石棒破片

一點

B石器

釣り手土器 一點

採取者 古道 則次 隆一

管理者 大和村教育委員会

土松新逸

つぎ合わせ形となりゆくいにしえの壺のかけらのいのちあること積みあがりしかけら形よき器となりぬ古え人の魂こもるがに

◎東氏居館跡の

発掘調査

昨年七月末から一〇月にかけて発掘調査され、一万点余の陶器片、木製品片等が出土し、中世庭園(池の石組)が検出されました。

今年も引き続き発掘調査されることとなり、近日着手されますが、会員各位のご協力をお願いします。

◎特別展

「美濃の絵馬」

四月二四日から
五月三一日まで

岐阜県博物館(関市小屋名、百年公園内)において、四月二四日から五月三一日まで、特別展「美濃の絵馬」が開催されますが、この特別展に明建神社の絵馬(重要文化財)がトップに展示されます。

昭和五十六年度 事業計画

一、会議

○総会の開催 四月二二日

○役員会の開催 四、六、九、

一、三の各月および臨時会

二、見学および研修会

○文化財に関する講演会

四月二二日

○現地研修(見学)の実施

南京博物院展および美濃の絵

馬展見学 五月七日

村内文化財見学 八月七日

東氏居館跡発掘調査現地お

よび明建神社祭礼七日祭り

奈良文化財見学 一泊二日

一〇月下旬〜一月上旬

本部主催研修事業に参加

その他臨時文化財見学

三、会報「文化財やまと」の発行

B5版八ページ 一回

各三〇〇部 九月、三月

四、文化財保護調査に協力

○東氏居館跡発掘調査

○その他

昭和56年度予算(案)

収入の部

項目	予算額
1. 前年度繰越金	6,399円
2. 会費	24,000
3. 特別会費	35,000
4. 補助金	5,000
5. 諸収入	3,601
計	65,000

支出の部

1. 会議費	5,000
2. 総務費	2,000
3. 役員会費	3,000
4. 事業費	46,000
5. 研修費	4,000
6. 発行費	6,000
7. 必要費	15,000
8. 消耗品費	5,000
9. 通信費	10,000
10. 負担金	12,200
11. 予備費	3,000
計	65,000

昭和55年度会計報告

収入の部

項目	決算額
1. 前年度繰越金	5,544円
2. 会費	19,400
3. 特別会費	34,800
4. 補助金	5,000
5. 諸収入	7,685
計	60,529

支出の部

1. 会議費	3,900
2. 総務費	7,360
3. 役員会費	3,164
4. 事業費	42,783
5. 研修費	3,928
6. 発行費	3,500
7. 必要費	6,000
8. 消耗品費	0
9. 通信費	6,000
10. 負担金	12,600
11. 計	59,883
差引繰越	6,399

文化財保護協会に 一参加下さい

文化財は、祖先が残してくれた尊い公共の財産です。わたくしたちのすぐ身近なところにある数々の文化財をみんなの力で護つてゆきましょう。

○大和村文化財保護協会が発足してから五年目をむかえ、会員数も一三〇名ほどになりました。この際より多くの方々に会員となつていただいで、本会の発展を期してゆきたいと思ひます。

○会員の特典として
・岐阜県文化財保護協会発行の「濃飛の文化財」(年一回)および特集「文化財美濃と飛驒」をお届けします。
・本会の会報「文化財やまと」(年一回)をお届けします。
・県本部主催の見学会・講演会研究会に参加できます。

・本会主催の文化財の見学会その他の研究会・講演会・文化財めぐり等に参加できます。
○会員になるには、年額二〇〇〇円をそえて、事務局(大和村教育委員会内)または、地区の理事へ申し込んで下さい。

編集後記

▽豪雪の残がいまだ家裏や北向きの山に見えますが、少しずつ暖かくなってゆきます。

▽会報第五号をお届けいたします。本年度は二回発行の予定でしたが都合で一回になりましたので、一〇ページとし、会員名簿を載せました。お互いの顔ぶれをみえますます親睦をはかり、本会の発展を期しましょう。

▽文化財の現地見学研修は、本会の大きな事業ですが、その見学記や、それを主材にした短歌・俳句などはその当時の思い出のたねとなり、本会報の内容を豊かにしてくれます。本号に寄せて下さった方々に感謝申し上げます。今後より多くの方々が寄稿下さることを願ひします。

▽大和村の指定文化財は、本年度新たに五件が加えられ、四三件になりましたが、まだ指定されない文化財、殊に民俗文化財は私たちの周囲に沢山残っていると思ひます。これらをしつかりと私たちの総力が護り、後の世に伝えてゆくことが現代の私たちに課せられた義務ではないでしょうか。(土松記)

「文化財やまと」第五号 昭和五十六年三月三十一日発行 発行者／大和村文化財保護協会 代表者／田直治 印刷者／石田百子